

ー現在、力を入れている事業や研究は。

十勝地域の食料自給率が1100%ということは、それだけ多くの顧客がいるということで、顧客が求める生産が重要になる。そのためには高品質安定多収栽培が最も大事で、品種、栽培法の改良を進めている。生産、流通・加工、販売、消費の中で、十勝産の農産物が、その強みを発揮して選ばれていかなければならない。一方、農家の戸数減少や高齢化が進む中、省力、低コスト、地域に合った生産の支援システムの研究も進めている。近年は気象の変動もあって、夏から秋の高温などで新しい病害虫の発生もあり、その対応にも取り組んでいる。

農業から食産業へ

ー十勝を含む農業発展のための展望は。

道立農業試験場が、他の研究機関と共に道立総合研究機構になって5年目。これまで以上に、試験研究の成果と波及効果が求められる。

今後10年をめどに▽自立的な経済活動が展開される社会▽持続的社會参画▽環境・自然に配慮した社会ーの3つを大きな目標にしている。

これからは安定して高品質な農産物を供給する一方で、フードバレーとかちや6次産業化が進められているように、十勝で作られたおいしい農産物を地元で加工するなど食産業としても振興していくことが大事になってくる。また、情報通信技術（ICT）など、複雑な技術を誰でも簡単に使えるような仕組みも、つくっていかねばならない。

帯広畜産大学、とかち財団など十勝の多くの研究機関

や地域と一緒に考え、行動し、問題解決を図っていきたい。

原点は帯広市内 十勝農事試作場

十勝農業試験場は1895年、帯広市内の札内川沿いに開設された「十勝農事試作場」が前身。3.04^{ha}の畑で、小麦や小豆、ビート、トウモロコシ、ジャガイモなど15の作物を栽培することから始まった。

1950年に「道立農業試験場十勝支場」に改称。帯広の都市化に伴い、58～60年の3カ年計画で現在地（芽室町新生南9線2）に移転し、64年に「道立十勝農業試験場」となった。2010年、「地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 十勝農業試験場」に改称した。

研究部は豆類、生産システム、生産環境、地域技術の4グループ。総面積78.01^{ha}、うち試験圃場は58.55^{ha}。豆類低温育種実験室や、てん菜育苗施設、病理昆虫実験室などを備える。



創立120周年を迎える十勝農業試験場の本庁舎

小椋氏(上士幌ドリームヒル社長)、 伏見氏(大樹町長)に宇都宮賞 道の酪農発展に貢献

2015年1月11日

道の酪農発展に貢献した人を表彰する「第47回宇都宮賞」に、上士幌町の酪農法人ドリームヒルの小椋幸男社長（63）と、伏見悦夫大樹町長（74）が選ばれた。宇都宮仙太郎翁顕彰会（札幌市、北良治理事長）が9日に発表した。

同賞は道の酪農の先駆者・故宇都宮仙太郎氏の業績にちなみ、1968年に創設。酪農経営、酪農指導、乳牛改良の3部門で毎年表彰し、十勝の受賞者は23人となる。

小椋氏は酪農経営部門での表彰。2003年に地域の酪農家とドリームヒルを設立し、生乳出荷量が全道1位、全国でも5位の実績を誇る。地域の過疎化が進む中で、法人設立により地域酪農の衰退を未然に防ぎ、コミュニテ

ィーの維持に尽力した。

経営では粗飼料生産を別会社に委託し、搾乳と飼養管理に特化。畑作農家への飼料用トウモロコシ委託栽培を全町に広げている。

伏見氏は酪農指導の部で表彰。99年に大樹町長に就任し、農道整備、草地造成、家畜ふん尿処理施設の整備を推進。新規就農希望者や後継予定者など、担い手確保に尽力した。農協と協力し、搾乳牛の増頭や牛舎の改修に独自の補助も実施してきた。

十勝以外では、オホーツク管内小清水町の藤原正博氏（64）も酪農経営の部で選ばれた。表彰式は3月1日に札幌市内のホテルで開かれる。